

二〇〇三年度

大学院文学研究科修士論文目録
文学部卒業論文目録
文学会賞授賞卒業論文要旨

愛知大學文學會

二〇〇三年度大学院文学研究科修士論文目録

修士論文

文学研究科

日本文化専攻

〇ML〇〇二 王 玉 蘭 『道教と民間信仰』の研究

〇ML〇〇一 永 井 哲 夫 大垣藩蘭方医 江馬活堂

地域社会システム専攻

〇ML〇七四 山 田 美紗都 高齢社会における福祉と住生活

〇ML〇七二 古 橋 千 晴 核家族と拡大家族における妻の家庭内役割に関する意識調査の比較研究

欧米文化専攻

〇ML〇八〇 畑 中 美 香 Christian Kracht: "Faserland" へのドイツの Popliteratur の一例として

二〇〇三年度文学部卒業論文目録

哲 学 科

東洋哲学専攻

〇P四〇二	藤原 寛子	死生観の研究
〇P四〇四	沼田 薫	古代中国の死生観
〇P四〇五	稲吉 春美	孔子のカリスマ性を考察する
〇P四〇六	丹波 篤志	仲長統
〇P四〇七	小松 匡	仏像と明王から浮かぶ思想
〇P四〇八	三輪 万里子	中国における価値観の変遷 ——経と権を通して——
〇P四〇九	田 渕 敏規	王充の合理主義について
〇P四一一	築山 直樹	荀子について
〇P四一三	畑山 輝幸	『論語』から読み解く孔子の思想
〇P四一四	林 隆 祥	王安石の思想
〇P四一五	平田 聡	荀子の思想
〇P四一六	高橋 宣人	『墨子』——兼愛という思想——
〇P四一七	河野 宙子	易について
〇P四一八	神田 那穂子	『貝原益軒の思想——江戸時代の教育観を探る——』
〇P四一九	三浦 清子	中国における反戦詩の研究
〇P四二〇	早川 夏恵	現世利益はどうあるべきか ——親鸞の視点から——
〇P四二一	後藤 良太	荻生徂徠の「道」について
〇P四二二	三浦 弘美	荘子の思想
〇P四二三	栗山 直樹	ブツダの輪廻転生
〇P四二四	新見 格	日本神話の起源と特色
〇P四二五	栗山 直樹	『韓非子』の思想
〇P四二六	高橋 真	ソクラテスはなぜ対話したのか
〇P四二七	松本 康祐	仮面ライダーを哲学する
〇P四二八	新名 祥子	ロック哲学による考察
〇P四二九	三浦 知哉	相対主義と個人主義の間に ——ニーチェの道徳説について——
〇P四三〇	田中 愛	自由な存在である私の生き方を求める
〇P四三一	松本 友紀	現代社会における個人の意味
〇P四三二	松本 友紀	メルロー＝ポンティの言語論

〇P四〇七 平野実香 フランス現代哲学における他者の問題

〇P四〇八 辻 恵美 宗教、常識、科学——人間の様々な信念のあり方について

〇P四一二 中原有紀 戦争とメディア——ハンナ・アーレントを手がかりに——

〇P四二三 澤村陽子 啓蒙と野蛮

〇P四二四 水谷寛之 ハイデガーとシュレアリスマ

〇P四二五 柴本大慈 言葉と心

〇P四二六 山口 雅 人生観の形成についての考察

〇P四二七 中村賢一 ニーチェの道徳批判について

〇P四二三 加藤伸一郎 カント哲学における「神」の意味

〇P四三四 喜藤賢司 自己の存在と他者との関わりについて

〇P四二〇 山田 潤 ニーチェとニヒリズム

〇P四二三 須佐見 尚子 ハイデガーにおける存在と無

〇P四二八 福島清隆 ベルクソンの記憶について

社会科学

社会学専攻

〇S五〇一 塚田通夫 人間発達と幼児期

〇S五〇二 山田雄三 死に方上手の満足死——満足死に至るための諸要因——

〇S五〇三 柴田 登 メディア表現の規制と社会

〇S五〇五 出羽千恵 日本人のコミュニケーションの特徴について

〇S五〇六 吉田雅美 現代における若者とリアリティ

〇S五〇七 山下一彰 愛知万博と社会的影響

〇S五〇八 関根智宏 結婚願望と子供への期待感

〇S五〇九 岡田 亮 テレビ番組のやらせと騙し

〇S五一一 平松雅大 福祉のまちづくり

〇S五一二 稲垣眞和 社会体制と社会運動

〇S五二三 安達生武 ポピュラー音楽と社会の相互関係

〇S五二三 天野友貴 日本人の旅行観

〇S五二五 小水久美子 少年犯罪と家族のあり方

〇S五二六 宮崎良太 現代社会と武道

〇S五二七 竹内一仁 現代社会における家族関係の希薄さ

(西洋哲学専修)

〇〇五〇八 橋川 涼 食糧事情からみる飢餓問題と
ごみ問題

〇〇五〇九 大村 宏 実 高齢者介護と家族

〇〇五〇〇 藤田 恵 ドメスティック・バイオレン
スと傷ついた女性への対策

〇〇五〇三 太田 敦 子 少年犯罪の社会学

〇〇五〇三 石川 裕 美 ドメスティック・バイオレン
ス(家庭内暴力)と社会との

関わり——理想的な男女の関係を
を考える——

〇〇五〇六 小出 浩 人 社会意識とプロバガンダ

〇〇五〇七 川上 ま ほ インターネットのメディア特
性

〇〇五〇六 山田 望 日本社会と葬送儀礼

〇〇五〇五 浅井 優 フリーター思想による、ヒッ
ピカルチャーへ憧れる心理

分析

〇〇五〇〇 松下 往 代 自己開示の効果——ホンネで語
ることのすすめ——

〇〇五〇三 瀧口 剛 日本を中心として見たエネル
ギー政策と地球環境

〇〇五〇三 和田 健 治 犯罪と社会学

〇〇五〇三 鈴木 達 也 メディア暴力——メディア映像

〇〇五〇四 中野 沙 織

が人々に及ぼす影響——
女性労働者の実情——多様化
するライフスタイル——

〇〇五〇五 谷内 久仁子 地域社会の現状と地域活性化
の課題——大府市の文化活動を
事例として——

〇〇五〇六 石原 和 也 レイヴカルチャーと平和

〇〇五〇七 太田 奈緒美 高齢化社会と交通状況

〇〇五〇八 近藤 晶 代 社会との関連でみる父親と娘
の關係に関する研究

〇〇五〇九 井手 麻美子 ひきこもりについて——社会
の変化と心の病——

〇〇五〇〇 杉本 知 大 ロック・ミュージックの発展
——ロックの拡大と社会的役割
の変化——

〇〇五〇二 伊藤 里 美 Jリーグにおけるサポーター
の意識

〇〇五〇四 山下 将 司 ドキュメンタリーの社会学
——フィクションとしてのド
キュメンタリー——

〇〇五〇五 宮崎 里 弥 ビジネスにおけるアイデン
ティティの確立とコミュニ
ケーション能力の形成——異

応用社会学専攻

文化コミュニケーションから考える——

〇〇五二一 河合 晋 平 少年犯罪の社会病理性

〇〇五二二 立 川 智重子 自殺の社会学

〇〇五二三 近 藤 聡 子 現代日本における社会不安について

〇〇五二五 山 本 智 恵 食の社会学

〇〇五二六 田 中 なつみ なぜ、今、大人にも絵本が読まれているのか?——絵本の

与える心理作用効果——

〇〇五二七 石 田 恵 子 女性のライフスタイルをめぐって

〇〇五二八 井 上 恭 宏 広告と消費者行動

〇〇五二九 築 取 幸 恵 流行と女子学生の関係

〇〇五三〇 玉 井 佐代子 アダルト・チルドレンの比較社会学

〇〇五三一 淵 田 知 美 大麻の実態とその是非について

出版動向から見る読書の移り変わり

〇〇五三二 岩 田 浩 一 報道における人権侵害

〇〇五三三 福 岡 桂 一 やおいに見るファンタジー共

〇〇五三四 山 下 由 夏

〇〇五二六 加 藤 友 美 同体と少女たちの自己像

〇〇五二七 稲 垣 美 幸 菓子ブームの背景とその戦略

〇〇五二八 水 谷 通 宏 現代の結婚——結婚観の変化——

〇〇五二九 越 野 晴 美 高齡社会と介護保険制度

〇〇五三〇 辻 勝 仁 児童虐待と子育てにおける環境の変化

〇〇五三一 中 村 亜寿紗 社会生活と時間

〇〇五三二 岡 本 朋 子 インターネットコミュニケーション——オンラインとオフラインの対人関係——

〇〇五三三 稲 田 晋 児童虐待と児童環境

〇〇五三四 風 間 あ や 嫉妬の研究——個人特性による対処行動の違い——

〇〇五三五 伊 藤 奈 々 ケーシオン 育児による親子のコミュニケーション

〇〇五三六 村 松 由佳子 若者、家族と消費社会

〇〇五三七 大 林 沙矢香 性にかかわる子どもの権利と自己決定権——狙われる子どもの性——

〇〇五三八 石 原 康 浩 現代社会と共依存

〇〇五三九 現代社会と共依存

〇〇五四〇 石 原 康 浩 ターミナルケア・ホスピスという選択

〇S五二九 玉置悦子 女性の雇用について——女子

パートタイマー——

〇S五三〇 石川恵子 犯罪報道のあり方

〇S五三一 佐藤久夫 大学生の勉学に関する意識調

査

〇S五三三 宮崎淳子 阪神・淡路大震災における地

域特性とネットワーク

〇S五三五 佐藤有香 現代社会とひきこもり

〇S五三五 林亮介 第一印象のよしあしに影響を

与えるパーソナリティおよび
特性について

〇S五三六 松岡絵里奈 高齢者福祉——高齢社会に向

てのまちづくり——

〇S五三七 高橋拓也 広告のコミュニケーション性

〇S五三八 前田晴加 少年犯罪・非行の背景

〇S五三九 奥山薫 高齢期と制度保障

〇S五四〇 大井由美 児童虐待

——虐待者の視点から——

〇S五四一 五島知子 「島唄」を通じてみる沖縄の

人々のアイデンティティ

〇S五四二 佐藤良友 ストレス解消における飲酒の
効用

〇S五四三 小塩仁美 家族の情緒安定機能について

〇S五四四 長江弘恵

市民参加による「脱介護」の
可能性——高浜市における宅老所
を例として——

〇S五四五 浪岡孝寛 表現・報道の自由と報道被害

〇S五四六 土井惇子 不登校の社会学

〇S五四七 坂田知奈美 現代社会の孤独感

〇S五四八 藤田陽子 生涯学習と高齢社会

〇S五四九 小出恵子 現代社会と死

〇S五五〇 河合満 日本文化から見る日本人のこ
ころ

〇S五五一 大脇知江 マスコミの企業性と報道内容
について

〇S五五二 高木彬宏 メディアコミュニケーション
と対人関係

〇S五五三 加藤裕貴 本当の頭の良さととは？——社
会的知性の要素と認識——

〇S五五四 高岡絵美 少年犯罪とその心理行動

〇S五五五 北河有味子 音楽における社学的価値性の
推移——労働歌から癒し系音楽
へ——

〇S五五六 伊藤藍 ジェンダー論にもとづく友人
関係

〇S五五七 久納亜紀子 ドメスティック・バイオレン

スの実態と要因

院政策

(応用社会学専修)

七五三 竹本 修

「宗教」行事と宗教心

〇H六二九 佐藤 秀伸 戦国期信濃の情勢と武田氏の支配について

史学科

日本史専攻

〇H六一 鈴木 聖也 本能寺の変前後の各武将の動き

〇H六三三 花松 亜希子 知太政官事論

〇H六〇六 北川 絵理 藤原仲麻呂政権と対外関係

〇H六〇四 石川 梓 光明皇后論

〇H六〇七 上田 早織 遠州平田門人についての一考察

〇H六〇六 山森 啓司 日本古代の印章について

〇H六〇八 田中 雄介 中世の戦について

〇H六〇三 中村 れい 律についての一考察

〇H六〇九 羽田 浩二 木曾義仲と源平合戦

〇H六〇三 鈴木 夢実 平安初期の橘氏について

〇H六一〇 木村 千春 養老律令に関する一考察

〇H六〇三 野末 良次 中世民衆論

〇H六一一 相澤 伸彦 日本古代史における女帝

〇H六〇四 宮崎 仁智 明応の政変前後における室町幕府

〇H六一二 今泉 健一 武田氏の権力構造について

〇H六〇三 内藤 宣宏 按察使について

〇H六一三 水科 智博 桶狭間合戦史料に見られる虚実性——それが後世に及ぼした影響——

〇H六〇七 中尾 訓久 三河一色氏についての一考察

〇H六一四 山田 秀一 関東公方足利氏と関東武士について

〇H六〇六 渡會 哲子 恒武朝と渡来系氏族

〇H六一五 吉川 玲子 関東公方足利氏と関東武士について

〇H六〇四 長田 篤 武田信玄と駿河について

〇H六一六 石川 菜実子 発給文書にみる今川義元の寺

〇H六〇三 鈴木 圭佑 中世における流鏑馬行事

〇H六一七 石川 菜実子 発給文書にみる今川義元の寺

〇H六〇四 鈴木 麻友美 飛騨制度の一考察

〇H六一八 石川 菜実子 発給文書にみる今川義元の寺

〇H六〇四 林 紳太郎 戸田氏について

〇H六四五 青山有紀 壬申の乱と美濃国

〇H六四七 榊原史子 尾張国知多郡における神職支配の一考察

〇H六四八 福島真由美 美濃国安八郡楡保村における近世人口変化

〇H六四九 小林健太 伊勢の助郷
——亀山藩を中心に——

〇H六五〇 本行辰朗 古代駅制について——駅家機能の運営を中心に——

〇H六五一 北しおり 大浜騒動——菊間藩少参事服部純に関する一考察——

〇H六五二 宮田暁 平将門の乱について

〇H六五八 坂本裕美子 平安前期の対新羅関係について

〇H六六三 鬼頭佳津己 中世の農業形体——水田二毛作の展開——

〇H六六五 高橋尚子 不改常典に関する一考察

〇H六六八 板橋高志 中世農村における自治について

〇H六六三 山下廉太郎 三河一向一揆について

〇H六六三 筒井慶和 松平氏の発展と三河の情勢

〇H六六三 砂塚俊洋 越後国柏崎陣屋役人の生活
——桑名・柏崎日記より——

〇H六六四 羽江優子 持統天皇論

(日本史専修)

〇H六六四 土屋健二郎 源頼朝挙兵と伊豆・相模の武士団

東洋史専攻

〇H六六一 壁谷尚美 明清時代における女性の社会的地位について

〇H六六三 倉橋紗恵子 和蕃公主からみた唐代の国際秩序

〇H六六四 野村知弘 嘉慶白蓮教の乱前後の緑営について

〇H六六六 西村志都子 則天武后の人材登用について

〇H六六七 小川陽介 明前期における北辺への軍餉輸送問題——開平衛を中心として——

〇H六六八 辻原明穂 明代の文人徐渭について

〇H六六九 勝田歩 베트남の八月革命について

〇H六七一 松野恵美 唐代の坊牆制について

〇H六七三 鈴木隆之 明末・清初の宣教師と典礼問題

〇H六七三 渡辺美奈子 インドにおける「不可触民」の発生について

〇H六七五 小林文子 ベトナム戦争下における北ベ

トナムの民衆について

〇〇H六二六

渡辺 加南子

明代後期の蝗害について

〇〇H六二七

柏木 直樹

シンガポールの公衆衛生政策と国民統合

〇〇H六二九

所 佳乃子

明代万暦期の三殿火災について

〇〇H六三三

土屋 潤一郎

唐におけるソグド人の活動について

〇〇H六二五

若山 優子

ケマル・アタテュルクの女性観

〇〇H六二六

渡辺 淳宏

袁了凡と明末の民衆教育について

〇〇H六二八

横関 靖恵

金末の武將武仙について

〇〇H六二九

中川 真介

太平天国革命の民族意識について

〇〇H六三〇

小森 由理

従軍慰安婦問題について

〇〇H六三三

加藤 美香子

タイ国における華僑問題の発生について

〇〇H六三三

王 憲彬

敦煌文物の流佚について

〇〇H六〇二

西岡 つかさ

藍玉の獄について

〇〇H六〇二

山本 大輔

宋代茶の普及について

〇〇H六〇九

宮城 秀行

劉六劉七の乱について

〇〇H六二三

梅田 有里

植民地下ビルマにおけるイン

ド人移民について

〇〇H六二五

村上 央

日本軍政下ビルマにおける日本語教育

〇〇H六二七

天野 純希

元朝期のモンゴル至上主義の実態

〇〇H六三〇

荒木 洋平

日貨排斥運動の経済的意義について

〇〇H六三三

前川 博信

明朝と琉球の關係について

〇〇H六三四

山本 貴充

イギリス植民地支配とティーパー王觀の形成

〇〇H六三五

加藤 陽子

清朝文字の獄について

〇〇H六三三

伊神 尚代

前漢代における皇后權、皇太后權について

(東洋史専修)

〇〇H六三三

清水 康喬

元代の紙幣制度について

〇〇H六三三

笠井 敦史

明末期における熊廷弼の対滿州防衛策

地理学専攻

〇〇H六〇二

坂井 裕紀

豊橋市における酒場の分布と立地条件

〇〇H六〇二

沖本 涼子

飯田市における農家の家屋形態とその変化

〇〇H六〇三

浅田 孝文

知多半島北部の一農家におけ

る耕作暦の変遷

〇H六〇四 龜山 紘樹
尾張旭市の土地利用変化について

〇H六〇六 山本 朋宏
岡崎市の生活環境評価
GISを用いて

〇H六〇八 神田 真智子
名古屋市における喫茶店の立地展開について

〇H六〇九 渡辺 慎也
日帰り温泉施設の立地について
(三重県中勢地域を事例に)

〇H六一〇 谷本 佳織
山地流域における土砂の生産・流出について——黒部川、三峰川を事例として——

豊橋市の商圏変容と課題

〇H六一一 津曲 将成
——三河地区の各都市商圏も考慮して——

鳳来町における棚田の畦畔率について

〇H六一三 半谷 佑樹
長野県下伊那地域の猪・鹿肉の流通分化とその要因

〇H六一四 西沢 春佳
東讃におけるうどん食の文化と健康

〇H六一五 青井 裕子
豊橋市から見た名古屋市・浜松市・東京への親近性とその

〇H六一六 井口 浩

要因

近世京都における旅人の参観地について

〇H六一七 廣瀬 優也
一宮市丹陽町における一九世紀後半と現代の島畑の形態と土地利用

〇H六一八 沢井 暁
東海地区におけるめんつゆの分布について——東海道線の駅の場合——

〇H六一九 杉原 宗二郎
温暖化とサクラの開花日変化の関係——岐阜市と高山市を事例として——

〇H六二〇 田島 猛
浜松市における小売業と商業店舗の郊外立地

愛知県尾張地方における稲干場の分布と立地

〇H六二一 川見 浩紀
寛 敏典

〇H六二二 寛 敏典

日本・中国文学科

日本語日本文学専攻

〇L七〇一 高島 滋行
梶井基次郎「檸檬」論

〇L七〇二 服部 友美
夏目漱石『行人』論

〇L七〇三 荻原 健一
太宰治「人間失格」論

〇L七〇四 深津 美絵
『とほすがたり』研究

〇L七〇五

〇七〇六 手嶋 祐子 『とりかへばや』研究

〇七〇八 古川 千裕 遠藤周作『沈黙』論

〇七〇九 岩瀬 由香 『英草紙』研究

〇七〇〇 愛甲 匡広 『ささやき竹』研究

〇七〇一 補永 貴子 三島由紀夫『禁色』論

〇七〇二 林 英理奈 『蜻蛉日記』における自然描写

〇七〇三 谷村 憂子 『枕草子』研究——中関白家の悲劇について

〇七〇四 山本 絵美 夏目漱石『彼岸過迄』論

〇七〇五 吉野 梨沙 夏目漱石『こころ』論

〇七〇六 西川 久美子 芥川龍之介『地獄変』論

〇七〇七 鈴木 邦嘉 太宰治『トカトントン』論

〇七〇八 枅谷 祥代 『源氏物語』における末摘花像——ものづつみを中心に——

〇七〇九 安藤 みな子 『玉水物語』研究

〇七一〇 清水 健児 『つゆのあとさき』論

〇七一〇 藤原 寿美絵 夏目漱石『こころ』論

〇七一〇 白井 公浩 遠藤周作『海と毒薬』論

〇七一〇 田中 香織 夏目漱石『それから』論

〇七一〇 大橋 良洋 夏目漱石『こころ』——「先生」と「私」との関係と、「私」の役割

〇七一〇 加納 三栄子 『葵上』論

〇七〇四 鈴木 晶子 川端康成『古都』論

〇七〇五 大橋 雅世 『源氏物語』における六条御息所像——年齢意識を中心に——

〇七〇六 山岸 弓夏 『古事記』研究——サホビメの巫女性について——

〇七〇七 飯田 理圭 『今昔物語集』研究——震旦部を中心に——

〇七〇八 伊藤 沙織 夏目漱石『三四郎』論

〇七〇九 間瀬 佳央里 夏目漱石『こころ』論

〇七〇〇 清水 秀豊 『今昔物語集』の鬼について

〇七〇一 柳川 由佳 『源氏物語』の「憂し」について——憂き思いの行方——

〇七〇二 奥村 歩美 川端康成『千羽鶴』論

〇七〇三 竹嶋 小織 樋口一葉『たけくらべ』論

〇七〇四 岩橋 正雄 夏目漱石『坊ちゃん』の主題の考察

〇七〇五 中国語中国文学専攻

〇七〇六 柴田 悠紀 張愛玲『傾城の恋』について

〇七〇七 夏目 悠子 中国児童文学について

〇七〇八 岡部 葉子 玄奘三蔵

〇七〇九 石川 ゆかり 中国飲茶文化

〇七一〇 高橋 史恵 紅樓夢人物論——林黛玉、薛宝釵を中心として

〇七二九 荒木理恵子 『聊齋志異』の中の動物
〇七二〇 伊藤奈津江 『搜神記』における木について

〇七二二 藤田麻里 黄帝と炎帝の戦いについて
〇七二三 藤井真紀子 木蘭詩

〇七二四 進士武 曹操

〇七二〇 箕浦千絵 映画「霸王別姫」と陳凱歌像
〇七二四 横井亜衣 八〇年代中国女性文学考

九七二八 柴田博隆 — 諾容「人到中年」を中心に —
李白飲酒詩選

欧米文学科

英語英米文学専攻

〇七五〇 杉山奈保子

近代英語の orthography について

〇七五二 水谷侑紀

シェイクスピアの女性

— ロザリンドとヴァイオラを通して —

〇七五四 徳田歆奈

アリス・ウォーカー研究

〇七五五 岩田和代

『The Millstone』について

〇七五七 瀧下あゆみ

ビートルズの詩の世界

〇七五八 岩田憲治

英語における善と悪を表わす語について

〇七五九 野村朋未 ヴィクトリア時代の文学と女性

〇七五〇 兼子理恵 『エデンの東』研究
〇七五一 富田亜紀子 『マクベス』における野心と矛盾

〇七五二 岩畑繁樹 日本語に取り込まれている英語の用法に関する一考察

〇七五三 早川由里子 イデオムの日英語比較

〇七五四 小林茜 英国の紅茶と日常生活の関わりについて

〇七五五 谷口りえ 英和・和英辞典にみる語義記述と語のイメージについて

〇七五六 福富恵美子 *The Catcher In the Rye* の日本語の翻訳比較研究

〇七五七 神谷恭子 *Virginia Woolf の To The Lighthouse* について

〇七五八 清本成臣 米文学作品における差別表現についての研究

〇七五〇 赤羽由久 近代英語の前置詞の研究

〇七五二 安川亜友子 『青い眼がほしく』研究

〇七五三 笹本敦子 Thomas Hardy の *Tess of the D'Urbervilles* について

〇七五三 清水紀公子 『カラーパープル』における

女性像

- 〇〇L七五四 樋田 恵 イギリスの酒場の歴史
 〇〇L七五五 大家 佐知子 “THOU”と“YOU”における一考察
 〇〇L七五六 吉野 和弥 『ハックルベリー・フィンの冒険』研究
 〇〇L七五六 横井 ひとみ A Study of John Clare
 〇〇L七五九 新開 真梨 アメリカ黒人英語の語彙の研究
 〇〇L七五三 永松 真依 シェイクスピア劇に学ぶ、恋にまつわる名台詞
 〇〇L七五三 空屋 貴代 シェイクスピア悲劇における家族 “ハムレット”と“オセロー”の比較
 〇〇L七五四 沖 誠子 『リア王』の登場人物の研究
 〇〇L七五五 伊藤 かおり マザー・グースの残酷性について
 〇〇L七五六 鈴木 真梨子 黒人英語研究
 〇〇L七五七 河村 友美 Jane Austenの *Pride and Prejudice* について
 〇〇L七五八 本山 里美 意味論の研究
 〇〇L七五九 長屋 有美 ギッシング『余計者の女たち』——ローダ・ナンの生き方
- 〇〇L七五〇 壁谷 映子 はこべ——
 A Study of Romeo and Juliet
 〇〇L七五一 中村 華枝 A Study of Thomas Hardy's Poems
 〇〇L七五二 美濃浦 志保 初等英語教育における発音指導とフォニックスの応用について
 〇〇L七五三 荒木 裕美子 A Study of William Butler Yeats
 〇〇L七五四 宮地 麻美 A Study of William Wordsworth
 〇〇L七五五 山田 美美 “Ghost” “Spirit” “Soul” に関する歴史的考察
 〇〇L七五六 岩井 咲野子 ハムレットの狂気
 〇〇L七五〇二 松村 裕也 A Study of Hemingway
 〇〇L七五七 仲 真澄 A Study of Shakespeare on Film
 〇〇L七五八 古橋 充 A study of OF MICE AND MEN
 〇〇L七五九 児玉 達郎 イギリス宗教改革と女性——テューダー朝を中心として——
 〇〇L七五六 小林 伸光 自然事物を表す Anglo Saxon

起源の語彙の研究

〇七五七 永田 文美 A Study of *Ohello*

〇七五八 天野 百合子 『野性の呼び声』研究

〇七五九 加藤 恵梨 A Study of Native American

(文学科英語英文学専修)

〇七六〇 酒井 裕一郎 *Tess of the d'Urbervilles* 研究

ドイツ語ドイツ文学専攻

〇七六一 堀 友紀子 ベートーヴェンについてゝ生涯とその作品ゝ

ヴァイツェッカー演説に関する評価について

〇七六二 杉山 ひろみ グリム兄弟のメルヘン収集について

〇七六三 平田 沙智 ミヒヤエル・エンデ『はてしない物語』について

〇七六四 横田 あづさ アンネ・フランクについて

〇七六五 古田 有香 ベートーヴェンについて

〇七六六 北原 尚子 — ベートーヴェンとモーツァルトの比較 —

〇七六七 齋田 雄也 ファウスト 第一部ゝ無意識下のゲーテゝ

〇七七八 佐藤 真梨 フランツ・カフカ『変身』に

について

〇七六二 鶴田 涼子 グリム兄弟とアンデルセン

— 口承文学と創作文学の比較を通して —

〇七六三 安田 淳子 ヨハンナ・シュピリ『ハイジ』について

〇七六四 小野 香織 ウィーン交響楽団について

〇七六五 松本 玲子 ミヒヤエル・エンデ『はてしない物語』ゝ原作と映画を比較してゝ

〇七六六 井口 千春 グーテンベルクについて

(文学科ドイツ語ドイツ文学専修)

〇七六七 山根 裕平 七〇年代のジャーマンロックについて

フランス語フランス文学専攻

〇七六八 大場 麻友美 ミュッセにおける恋愛と詩について

〇七六九 安田 敦子 シャルル・ペローの童話について

〇七七〇 加古川 絵里 フランス社会における失業者問題

〇七七一 鈴木 亜矢子 ゴミ問題について — フランスと豊橋の場合 —

〇七三七 梶 絵梨

ラ・ロシュフーコーの箴言について

〇七三八 積 辰也

ミシェル・トゥルニエの『聖女ジャンヌと悪魔ジル』について

〇七三九 加藤 沙那恵

フランス人の旅行観

〇七四〇 水谷 里奈

アレクサンドル・ジャルダンの『ぼくの小さな野蛮人』について

〇七四一 続 木 大輔

フランス人の環境問題意識について

〇七四二 藤 川 太郎

フランス移民から予想される今後の世界移民

〇七四三 松 本 美耶子

フランス人と天候——ものに對するフランス人の考え方——

〇七四四 畑 中 美佳子

現代フランスにおける旧植民地問題

現世利益はどうあるべきか

——親鸞の視点から

今では日々の生活の中で神仏に手を合わせることも少なくなつたが、人々が神仏に何らかの利益を頼む姿は、今も昔も変わらない。これまで次々と成立した宗教は、「現世利益」という、その教えの有効性を説くことで発展してきた。例えば、合格祈願やお守りなどがそれである。信仰心の薄い人でも、初詣や葬式の際に今なお手を合わせるのは、人々が宗教に現世利益を期待している証拠だと言えるだろう。

ところがかつて、物質的な利益だけを提示していた現世利益を嫌い、否定的な態度をとつた人物がいた。それが、今回私が焦点を置いた親鸞である。彼は宗教の歴史に名を残したが、民衆の期待する現世利益を否定しながらも、どうして多くの人々に受け入れられ、今日まで存続できたのであらうか。

そこで、親鸞の思想を理解するために、彼の著作『教行

〇〇P四〇二〇 早川夏恵

信証』に沿い、様々な仏教書も参考に分析することにした。第一章では教行巻を扱い、親鸞の考える真実の教・行とは何かを明らかにした。ここでは、仏の教えが真実である根拠や、私たちが仏に向かい合う時の姿勢のあり方についても、私なりの解釈を述べている。

第二章は、親鸞の師匠である法然との出会いや、様々な苦悩を経た後の、思想の確立に至る経緯などを述べた。

第三章では『教行信証』の信証巻を取り上げ、親鸞が最も重視した「信」に始まり、その信の結果となる「証」に至るまでを記した。その過程において、念仏の重要性や、凡夫である私たちにも救済の手は差し伸べられていることを説いた、親鸞の意図を探っている。そして、親鸞を理解する上で一番重要な「他力」思想の深部を、私が納得し得た範囲ではあるが、読み手に伝えられるよう努めた。

第四章は方便化身土巻に注目した。そこでは『無量寿経』

にある四十八願の中の、第十九願・第二十願・第十八願を挙げて、親鸞の思想の遍歴が述べられている。初めに、第十九願の教えは浄土往生への道は善行の実践にあると説くも、そこには自己を肯定する態度があると親鸞は指摘する。そして、もろもろの善行の実践という行為に踊いた者には、次に第二十願を提示した。それはひたすら弥陀の働きにすがって、弥陀の名前を称えよという教えである。しかし親鸞は、それも自己の力に頼った姿でしかないとした。そのような考えから最後に示したのが、最も重要とされる第十八願である。私たちにおしみなく注がれている如来の慈悲を、信じることの大切さを説いている。この一連の流れを親鸞は三願転入と呼んだ。それを基に親鸞の意思をくみ取って、なかなか自力の姿勢から抜け出せない人へのメッセージとした。

宗教を学び初めたばかりの私には、親鸞を抜くこととはとても勇気のいることで、参考にした文献も非常に難解なものばかりだった。途中で挫折する不安もあったが、なんとか自分の答えを出せたと思っている。

私たちはみな、金銭など目に見える利益ばかりを願っている。心を豊かにしてほしいと願う人が、果たしているだろうか。親鸞は、念仏を称えることによつてただ広々とした心を持つことが、最大の利益だと説いた。それならば、当時の民衆にも可能だったであろう。彼が重要とした

のは、人々の精神的な部分を豊かにしてくれる教えこそが、真実の教えだということであった。今回卒業論文として親鸞と向かい合つてみて、宗教の新たな一面を見ることができた気がする。

やおいに見るファンタジー共同体と少女たちの自己像

〇〇S五二四 山下 由夏

私がこのテーマを卒業論文で取り上げた動機は、「やおい」と呼ばれる少年愛の世界に没頭する少女たちは何を思っているのか、そして、そうした世界が形成された社会背景には何があるのかを明らかにしたいと考えたことにある。私自身も一人のやおい読者であり、自らのそうした欲望は一体どこから来るものなのかという思いが、私をこの研究へつき動かしたというのも一つの要因である。

やおいとは一体何なのか。先に少し触れたが、それは美少年同士の恋愛関係つまり少年愛の世界を描いた小説やマンガを総称して使われる言葉である。この「やおい」と呼ばれるジャンルは今日、商業誌から同人誌まで大規模な市場を持つており、女性たちが作りあげた一つの文化であると言っても過言ではない。女性たちは、この文化の中でしか理解しえない記号を用いることで、互いの世界を共有することに成功した。

やおい創出の起源は、一九七〇年代後半までさかのぼる。この頃、「24年組」と呼ばれた作家たちによって、少

女まんがの中に少年愛が描かれ始めた。そして少年愛は、時代ごとにその舞台を移し、変化しながら、今日のような文化を作りあげたのである。一九八〇年代には同人誌へと舞台を移し、アニメと呼ばれる新たなジャンルを形成した。少年愛が、「やおい」と呼ばれるようになったのもこの頃からである。一九九〇年代には、やおい専門の商業誌が多数創刊され、やおい本が簡単に一般の書店で手に入るようになった。こうしたやおいの変化は、社会における女性のあり方に合わせて起こっているのである。七〇年代後半、少年を性愛の対象として描いた少年愛の登場は、既存のジェンダー規範に疑問を投げかけるという大きな役割を果たした。八〇年代、社会では男性より強い女性が現れると、やおいの世界でも、男性役と女性役が入れ替わり立場が逆転してしまうカップルが生まれた。九〇年代、女性にも社会的な選択権が保障されるようになると、やおいの中でも、女性役の少年は、自らで女性役という役割を受け入れ、主體的に恋愛をするようになる。このように、やおい

の性質と女性のあり方は連動して変化しているのである。

やおいについて、多くの識者や作家が口をそろえて言う事がある。それは、「やおいはファンタジー」という事である。そのファンタジー性は確かに言える事である。やおいは少年同士の恋愛を描いたものであるため、現実の男性同性愛と混同されがちであるが、両者は対極ほど異なるものである。そして、やおいのカップルは、全て運命的なつながりを持つていて、彼ら以外の第三者は全て邪魔なものとして描かれる。さらに、やおいのカップルは男性役、女性役ともに美少年でなくてはならない。現実世界では、とても起こり得ない理想化された愛がそこには描かれているのだ。そして、やおい少女が求める理想化された愛を描くには、男同士という関係は都合がいいのである。なぜなら、やおい少女は何らかの形で、既存のジェンダー規範によつて圧迫されてきた者たちであるが故に、男女間の恋愛物語では、自らの女性性を強く意識してしまうため、満足して楽しめないのである。しかし、やおいは、女性は初めから話に関係がない。主人公は男性なので女役を演じても、妊娠や結婚などの現実的なことは発生しない。やおい少女たちは、そうした現実性のない世界で、少年に自己を投影し、恋愛を楽しんでいるといえる。

やおいとは、既存のジェンダー規範によつて傷ついた少女たちがつくりだしたファンタジー共同体であると言え

る。その中で、互いのファンタジーを共有し合う事で、彼女たちは、自己を肯定し、現実世界へ戻つてゆくのである。

映画におけるシエイクスピア

九九七五一一七 仲 真澄

シエイクスピアは、今日でもなお世界中で愛されている作家の一人である。その理由を、彼の作品テーマのもつ普遍性だと言う事は簡単であるが、それを私なりのやり方で証明しようとした、これが私の卒業論文のスタートラインである。そしてその証明の場として、私は映画というジャンルを選んだ。

映画というものを通して考察しようとしたのには二つの理由がある。なにより自分がこのジャンルをこよなく愛している、ということ。そして何より、演劇として書かれた作品が、幾多の映画に姿を変えてもなお人々に受け入れられている事例によって、彼の作品の普遍性をより明確に証明できると思ったからだ。

証明の過程においてまず考えなければならないのは、演劇と映画の根本的な違いである。演劇にとつて最も大切なのは、俳優と観客が同じ空間を共有しているという事であり、そして互いをつなぐ「言葉」の存在である。特にエリザベス朝時代において、演劇は「見る」ものではなく「聞

く」ものであった。観客は、役者から発せられる言葉によって舞台上の世界を想像することができ、その人物をリアルに感じる事ができた。一方、映画においては「カメラ」の存在が何より大きい。「カメラ」によつて切り取られた絵が、いかにリアルであるかが最も大切だと言える。それ故映画では、映像すべてで説明する事が可能なのである。つまり「言葉」の演劇と「絵」の映画とは、根本的に違うメディアだと言う事が出来る。

では、その「言葉」を最も巧みに使った劇作家の一人であるシエイクスピアの作品は、どのように映画として表現されているのか。実際にシエイクスピア作品を元に映画化されたものを鑑賞すると、そこにはいくつかのパターンが発見された。第一に、あくまで原作に忠実であろうとする作品だ。その姿勢はローレンス・オリビエやケネス・ブラナーの作品によく見られる。しかしたとえ同じ作品の再現を目指した映画であつても、カメラによつて映し出された映像は作品によつて異なる。それは「言葉」を「絵」に置

き換える過程で生じる解釈の違いであり、また時に「絵」の力の恩恵がもたらすものである。

第二に、時代を現代にうつして原作のテーマを再現した作品である。「ウエストサイド・ストーリー」や「オー」などが当てはまり、当時の価値観を現代に置き換えるために、設定の変化や新たな要素が加えられている。その置き換えはテーマに新たな意味合いをもたらし、現代に生きる私たちにとってよりリアルに感じられる形に変わっている。

そして第三に、黒澤明の「蜘蛛巣城」などの、異文化で制作された映画である。これらは、文化が変わってもシェイクスピアのメッセージは不変であることを示している。シェイクスピア作品がもつ文化や言語における概念さえも翻訳することで、作品は形を変えてもおなじメッセージ性の強さを示しているのである。

演劇と映画、解釈、時代、そして文化という全ての違いを乗り越えて、これらの作品は「シェイクスピア」という一つのカテゴリーで括る事が出来る。そしてその理由こそは、私が説明を目指した彼の作品の持つ普遍性にほかならないのだ。

いったいシェイクスピアからヒントを得て作られた映画はどれくらいあるのだろうか。いわゆるシェイクスピア映画と呼ばれるものだけでなく、設定やストーリーから影響

を受けた作品を入れれば、その数は計り知れない。そしてこれからも、シェイクスピアの作品は、本来の演劇というジャンルを越えて色々な形で表現されていくに違いない。それでもシェイクスピアはシェイクスピアとして、人々に受け継がれていくのである。

グリム兄弟とアンデルセン

——口承文学と創作文学の比較を通して——

〇〇七六一 鶴田涼子

私は幼い頃からグリム童話やアンデルセン童話を好んで読んでいた。これらの童話に思い出深い人は少なくないと思う。私がこの論題を取り上げたのは、時を隔てて彼らの童話を読み返した際に何故か生じた印象の違いに驚かされたからである。本論文は幼い頃の記憶を呼び覚まし、童心を蘇らせるところから始まった私の中の論争である。

幼い頃何気なく読み、同じ様に楽しんでいたはずの二つの童話は全く異なるものであった。グリム童話を読んで想像する楽天的な世界とアンデルセン童話を読んで想像するどこかどんよりとした世界の謎に迫っていくと、両者が描き出した世界は非常に似通っているようで全く別の世界であることがはつきりと見えてきた。簡潔に言うところグリム童話はグリム兄弟によって集められた昔話の集合体であり、アンデルセン童話はアンデルセン自身によって創られた創作話である。同時にグリム兄弟は話の収集家、アンデルセ

ンは作家である。こうした違いに気付いた最中、両者の作品には類似した話がある事を知った。この事実に驚いた私はますます彼らのメルヒェンに興味を抱いたのである。

先述した類似作というのはグリム童話一一六番「青い明かり」とアンデルセン童話「火打箱」である。メルヒェンは大きくフオルクスメルヒェン（伝承メルヒェン）とクンストメルヒェン（創作メルヒェン）に分類出来るが、ここではこの二作品の共通点と相違点を探ることにより二つのジャンルを明確にし、また当初の目的であった印象の違いに迫る事を念頭に置いた。

この二作品の内容は「兵隊が魔女と出会い、望みを何でも叶えてくれる魔法の品を手にする。兵隊は国王の娘に会いたいと願い、策を練る。この企てが王に読まれ、彼は捕えられてしまうが、魔法の品に助けられ、ついには兵隊は王となり、王女と結婚する」という共通の流れをもつ。け

れども、実際の作品を見ていくと、描き方が大変異なっており、フォルクス・クンストの違いを顕著に示すものである。それは早速、話の冒頭から表れる。グリム童話の始まりは「むかしむかしあるところに……」とあり、これは昔話の決まり文句とも言える。この部分、アンデルセン童話では「一人の兵隊さんが街道を、一二、一二と行進していました」⁽¹⁾と具体的な表現を使っている。又、グリム童話には「醜い魔女」や「貧しい兵隊」の様な簡素な修飾が多いのに対しアンデルセン童話では直喩を用いるなど表現が独創的で、地名を話の中で使用することも昔話にはない特色である。(簡略)

フォルクス・メルヒエンよりグリム童話、クンスト・メルヒエンよりアンデルセン童話を取り上げて比較検討した結果、心理的影響の違いは話のモチーフよりも描写の違いから生じるものであることがわかってきた。グリム童話は話全体を楽しむもので、主人公の成長を短時間に感じられる面白さがある。又、主人公の気持ちは主人公の行動から理解出来る。一方、アンデルセン童話には随所に主人公の気持ちと言葉で表現されている。昔話には決まった形式があるが、創作話には決まりはなく、作者特有の描き方がある。アンデルセンは全ての話にアンデルセン自身が入り込んでおり、彼は時として人魚姫の人魚にもみにくいアヒルの子のアヒルにもなり得たのである。

メルヒエンの中の主人公は内的に変化する。何らかの目標を達成するため、難題を乗り越えるために考え、行動する。グリム童話では多くが幸福を得、アンデルセン童話では幸福を逃がす。この背後には彼自身の思いが密に込められているのである。様々な違いがあるけれども彼らのメルヒエンは我々に考え、想像する事、心を理解する事を教えてくれる。彼らのメルヒエンは互いに照らし合うことで確立し、今もなお生き続けている。私はグリム兄弟とアンデルセンの出会いに感謝の意を表したいと思う。

(1) 『アンデルセン童話 完訳』大畑末吉訳による。